

青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ

片岡 祥¹⁾
園田 直子²⁾

要 約

本研究では青年期における愛着対象の移行を検討した。146名の高校生と161名の大学生を調査参加者として、4つの愛着機能（近接性の維持、安全な避難場所、分離不安、安全基地）について対象が誰であるのか質問紙で調査した。その結果、高校生に比べて大学生では全ての愛着機能について親が対象として選択される割合が高かった。このことは、子どもの成長に伴い愛着対象が親から他の対象へ移行するという一般的な知見とは異なり、青年期後期において再び親が愛着対象としてみなおされる可能性を示唆する。また、高校生と大学生で恋人がいる者は、恋人や友人を愛着対象として選択する傾向があった。高校生で恋人がいない者は友人を愛着対象として選択する他に愛着対象が「いない」と回答する傾向があったが、大学生で恋人がいない者は親や友人を愛着対象として選択する傾向があった。青年期中期の青年は親から分離しており、青年期後期の青年は親を再び愛着対象としてみなおしているという可能性が考えられた。

キーワード：愛着対象の移行 親の位置づけ 愛着機能 青年期

問 題

青年期は愛着関係を築く対象が親から友人、そして恋人へと移行していく。愛着対象の移行は、保護を与えてくれる親との関係から分離し、対等な関係の中で友人や恋人といった新たな対象と愛着関係を形成する一連のプロセスを指しているといえる。

Bowlby (1969/1973) の提唱した愛着理論は元々、個人が不安を喚起された状況で、自身を保護してくれると思われる対象に対して近接することで主観的な安心感を獲得し、個体の適応価を高めることを想定した理論である。そのため、誰が愛着対象なのか、あるいは愛着対象として想定されているのは誰なのかは愛着理論において根本的なテーマであるといえる。愛着理論に関する初期の研究は主に乳幼児期を中心に進められてきた。乳幼児期の愛着に関する研究は、愛着対象が親であるという前提の下に行われてきた（例えば、

Ainsworth, Blehar, Waters & Wall, 1978; Main & Weston, 1981)。そのため、乳幼児期の愛着対象が誰であるのかはあまり問題にならなかった。

青年期以降の愛着研究は、乳幼児期において養育者との関わりの中で形成された自己や他者に関する心的表象である内的作業モデルを取り上げることで研究が行われてきた。そこでは、Main, Kaplan & Cassidy (1985) のように乳幼児期と同様に親子関係を青年期の愛着関係と見なしていると考えられる研究や、Hazan & Shaver (1987) のように青年期以降に形成された親密な対人関係である恋愛関係や友人関係を愛着関係と見なしていると考えられる研究が存在する。Bowlby 自身は、青年期においても親は安全基地として機能すると述べる一方で (Bowlby, 1973), 青年期に愛着対象が親から友人へ、そして性的関心を伴う恋人や配偶者へ移行すると述べている (Bowlby, 1969)。愛着対象の移行が起こることによって青年期の愛着対

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部

象が誰であるのかが明白でなくなるのである。

愛着対象の移行は青年期の発達課題を達成するための契機の一つとなると考えられる。親から他の関係へと愛着対象が移行するということは、不安を感じたり悩んでいるときに親を頼らなくなるということである。そのため愛着対象の移行は親からの心理的離乳 (Hollingsworth, 1928) を達成することに影響を与えると考えられる。また、友人や恋人へと愛着対象が移行するということは、見知らぬ他者と互いに助け合うことが期待できる対等な関係を形成していくことである。そのため、愛着対象の移行は同性や異性ととの親密な関係を構築するという発達課題 (Havighust, 1943) の達成に影響を与えうるだろう。さらに、親からの心理的離乳や友人や恋人と親密な関係を構築するという一連のプロセスは、既存の親子関係から離れて新たに親密な関係を自身で選択していくことである。しかし、このようなプロセスは簡単に完了するわけではなく、友人や恋人と新たな関係を作っては壊し、その度に親から分離しかけては戻るといったように、親と友人や恋人との関係の間をいきつ戻りつしながら、徐々に親からの分離と友人や恋人との親密で強固な関係の構築をおこなっていくと考えられる。そのような過程を経験することは、自己や他者との関係の中での自己の存在とはなにか、つまりアイデンティティ (Erikson, 1950) を確立する上で重要なことであると考えられる。

乳幼児期の親子関係と異なり親密な対人関係が複数存在する青年期において、どのような人を愛着対象としてみなせばいいのか。青年期の愛着関係は、乳幼児期の愛着関係と同様に4つの愛着機能(「近接性の維持(近くにいたい、一緒にすごしたいと思うのは誰か)」、「安全な避難場所(動揺したときや落ち込んだときに頼りたいのは誰か)」、「分離不安(離れたくない、離れているとき寂しいと思うのは誰か)」、「安全基地(近くにいて、必要なときに助けてくれると思うのは誰か)」)を有する関係であるといえる。そのため、青年期は個人にとって4つの愛着機能の対象となる人物を愛着対象と見なすことで、多くの研究者が同意している (Fraley & Davis, 1997; Freeman & Brown, 2001; Hazan & Zeifman, 1994; Trinkle & Bartholomew, 1997; Weiss, 1982)。従って、ここでいう愛着対象とは、個人にとって4つの愛着機能の1部または複数について対象となる特定の人物であると定義されるであろう。

青年期に起こる愛着対象の移行プロセスを明らかに

するために、Hazan & Zeifman (1994) は6歳から17歳までの子どもと青年を対象に、愛着対象が誰なのかについて調査を行なった。彼らは4つの機能のそれぞれについて対象となる人物は誰であるのかを1人問うという方法を用いて調査を行なった (WHOTO 面接)。その結果、年齢の増加に伴って「近接性の維持」、「安全な避難場所」、「分離不安」、「安全基地」の順に親から友人や恋人へ愛着機能の対象となる人物が徐々に移行していくことが示された。彼らの後に行われた研究では、児童期の愛着対象として高い割合で親が選択されていることや (村上, 2009; Nickerson & Nagle, 2005)、青年の愛着対象として友人や恋人が選択される割合が高いことが報告されており (Fraley & Davis, 1997)、Hazan & Zeifman (1994) の研究結果を支持しているといえる。

これらの研究にもとづくと、青年期に親から友人や恋人へ愛着機能の対象となる人物が移行してしまった場合、親は愛着対象でなくなることになってしまう。しかし、Bowlby 自身は青年期においても親は安全基地として機能することについて言及しており (Bowlby, 1973)、また青年期における愛着対象としての親の重要性を扱った研究も存在する (例えば Meeus, Oosterwegel & Vollebergh, 2002; 丹羽, 2005)。さらに、親は主要な愛着対象でなくなるだけであって、恒久的に愛着対象としてあり続けるといった考えを述べる論者もいる (Kobak, Rosenthal, Zajac & Madson, 2007; Trinkle & Bartholomew, 1997)。

Hazan & Zeifman (1994) の研究では愛着機能のうち「近接性の維持」と「安全な避難場所」の対象となる人物については、6歳から17歳にかけて徐々に親よりも友人や恋人の割合が増えていき、15歳から17歳時点では親が約20%、友人や恋人が約70%選択されている。しかし、「分離不安」と「安全基地」については6歳から17歳にかけて親と友人や恋人が選択される割合にあまり変化は見られず、15歳から17歳時点で親が約50%、友人や恋人が約40%から50%ほど選択されている。つまり、Hazan & Zeifman (1994) の研究結果からは、17歳以降に「分離不安」と「安全基地」の対象として親が選択されなくなるのかどうか明らかでないといえるだろう。そのため愛着対象の移行プロセスの中で、青年期中期から青年期後期にかけて最終的に親が愛着対象でなくなるのかどうか不明なのである。

17歳以降の参加者を対象にして行われた研究では、誰が愛着対象として選択されているのであろうか。

Fraley & Davis (1997) は大学生を対象に、「近接性の維持」、「安全な避難場所」、「安全基地」について、それぞれの機能の対象となる人物が誰であるのかを調査した。その結果は Hazan & Zeifman (1994) と同様に「近接性の維持」と「安全な避難場所」については親よりも友人や恋人が高い割合で選択され（親：14%～46%、友人や恋人：54%～86%）、「安全基地」については、友人や恋人に比べて親が高い割合で選択されていた（親：58%～62%、友人や恋人：38%～42%）。

Fraley & Davis (1997) の研究結果は3通りの解釈が可能である。第1に、Hazan & Zeifman (1994) が想定したように青年期が後半に進むに従って、親がやがて愛着対象でなくなるという考えである。この場合、Fraley & Davis (1997) の研究結果は親が「安全基地」の対象でなくなりつつある最中であると考えられることができるだろう。第2に、Hazan & Zeifman (1994) の想定とは異なり、青年期の後半に至っても親が依然として愛着対象としてみなされ続けるという考えである。この場合 Fraley & Davis (1997) の研究結果は、親は「近接性の維持」、「安全な避難場所」、「分離不安」という愛着機能の対象ではなくなるが、「安全基地」の対象として期待され続けると考えることができるだろう。第3に、親がいったん愛着対象でなくなり、再び愛着対象としてみなされるようになるという考えである。17歳時点での Hazan & Zeifman (1994) の結果に比べて、大学生を対象とした Fraley & Davis (1997) では「安全基地」の対象として親が約10%多い。このことは、「安全基地」に関して17歳時点で親から友人や恋人へ愛着対象が移行していった後に、大学生になって再び親が愛着対象として選択されている可能性を示している。

このように、Hazan & Zeifman (1994) と Fraley & Davis (1997) の研究結果からは、愛着対象としての親の移行に関して3つの解釈が可能であり、青年期を通して愛着対象としての親の位置づけは一致していない。そこで、どの解釈が妥当であるのかを明らかにするために Hazan & Zeifman (1994) と Fraley & Davis (1997) の研究をつないだ研究、すなわち青年期中期にいたりと思われる高校生と青年期後期にいたりと思われる大学生を対象に、それぞれが誰を愛着対象とみなしているのかを検討する必要があるだろう。

ところで、青年期に親を愛着対象とみなすか否かには恋人の有無が影響を及ぼすことが考えられる。Bowlby (1969) は愛着対象の移行に関して、親から友人、そして最終的に性的関心を伴ったパートナーへ愛

着対象が移行すると述べている。従って、青年期における最終的な愛着対象は恋人であると想定されるのである。Trinkle & Bartholomew (1997) の研究では、恋人がいる者は愛着対象として恋人が62%、親が30%、友人が6%選択されていた。恋人がいない者は、愛着対象として親が64%、友人が22%選択されていた。また、Hazan & Zeifman (1994) においても、15歳から17歳の参加者で愛着対象として友人や恋人を選択した者のうち、83%の者が恋人を愛着対象としてあげていた。これらのことから、恋人がいる者は愛着対象として恋人を選択する傾向がある一方で、恋人がいない者は愛着対象として親を選択する傾向があるといえるだろう。

さらに、恋人がいる者の中でも愛着対象として恋人を選択するのかどうかには、恋人との交際期間が関連することが明らかとなっている。Hazan & Zeifman (1994) は、18歳から82歳の参加者を対象に、恋人無し、交際期間が2年以下の恋愛関係がある者、交際期間が2年以上の恋愛関係がある者に参加者を分類して誰が愛着対象として選択されているのかについて検討している。その結果、恋人無し、交際期間が2年以下の恋愛関係がある者、交際期間が2年以上の恋愛関係がある者の順に愛着対象として親が選択される割合が減少し、恋人が選択される割合が増加していった。そして、交際期間が2年以上の恋愛関係がある者のうちの70%以上は愛着対象として恋人を選択する傾向にあった。そのため、恋人がいる者の中でも、交際期間が2年未満の者は愛着対象として親を選択し、交際期間が2年以上のものは愛着対象として恋人を選択することが考えられる。以上のことから、親が愛着対象として選択されるのかどうかについては恋人の有無及び交際期間の長さという観点から検討を行う必要があるだろう。

これまでみてきたように愛着対象の移行プロセスに関して、青年期が進むに従って親が愛着対象でなくなるのか、それとも親が愛着対象としてみなされ続けるのか、あるいは親がいったん愛着対象でなくなり再び愛着対象としてみなされるのかは現在のところ定かではない。本研究は青年期に起こる愛着対象の移行プロセスの中で親がどのように位置づけられるのかについて、青年期中期にいたりと考えられる高校生と、青年期後期にいたりと考えられる大学生を対象に調査を行ない検討する。愛着対象として親が選択されるのかどうかには恋人の有無及び交際期間が関連していると考えられるため、高校生と大学生の参加者を恋人の有無に

よって群分けして検討を行う。

方 法

調査対象者 福岡県内のA高校の高校2年生150名(男性55名,女性94名,不明1:平均年齢16.2歳)とB大学及びC大学の大学1年生から4年生161名(男性65名,女性96名:平均年齢19.3歳)であった。高校生150名のうち、恋人がいる者は38名(男性13名,女性25名),恋人がいない者は108名(男性42名,女性65名,不明1名),恋人の有無が不明の者は4名(女性4名)であった。また,大学生161名のうち,恋人がいる者は50名(男性20名,女性30名),恋人がいない者は111名(男性45名,女性66名)であった。

高校生で恋人がいる者のうち交際期間が2年未満の者は76.3%(29名),交際期間が2年以上の者は7.9%(3名),交際期間が不明の者は15.8%(6名)であった。大学生で恋人がいる者のうち交際期間が2年未満の者は80.0%(40名),交際期間が2年以上の者は18.0%(9名),交際期間が不明の者は2.0%(1名)であった。交際期間が2年以上の者が少ないため,本研究では交際期間の長さの違いによる分析は行わなかった。

質問紙 質問紙は表紙に交際経験の回数,現在の恋人の有無,現在恋人がいる者は恋人との交際期間について問う項目を載せ,その後以下に示す質問項目から構成された。

愛着機能を測定するためにHazan & Zeifman(1994)のWHOTO面接で用いられた質問内容を質問紙形式で用いた。質問項目の内容は「近接性の維持(近くにいたい,一緒にすごしたいと思うのは誰か)」、「安全な

避難場所(動揺したときや落ち込んだときに頼りたいのは誰か)」、「分離不安(離れたくない,離れているとき寂しいと思うのは誰か)」、「安全基地(近くにいて,必要ときに助けてくれると思うのは誰か)」であった。質問項目は自由記述で回答を求め,回答の1番初めに書かれた人物が該当する機能の対象となる人物であると判断した。

結 果

4つの愛着機能について選択された対象の種類は友人(友人,親友),恋人,家族,親,母親,父親,兄弟(兄弟姉妹),親戚,いとこ,先生,先輩,後輩,好きな人,おじ,おば,芸能人,ペット,なし(なし,いない),無回答であった。分析にあたって,家族,母親,父親という回答は「親」として扱った。無回答は対象がいない者とみなして「なし」として数えた。それ以外の回答は少数であったため,「その他」とした。そのため,本研究では,「親」、「友人」、「恋人」、「その他」、「なし」という5つのカテゴリーを後の分析で用いた。

高校生の恋人有り群と恋人無し群において4つの愛着機能について誰が対象として選択されているのかを算出した(表1,表2)。高校生の恋人有り群では,「安全な避難場所」を除いた他の3つの機能について恋人が最も高い割合で選択されていた(31.6%~55.3%)。「安全な避難場所」の対象として最も選択されていたのは友人であった(44.7%)。4つの機能の対象として,恋人と友人が選択された割合を合わせると68.4%~73.7%であった。高校生恋人無し群では4つの愛着機能のすべてにおいて友人が選択される割合が最も高かった(38.9%~60.2%)

表1 高校生恋人有り群において4つの愛着機能について選択された対象の割合

	親	友人	恋人	その他	いない	総計
近接性の維持	10.5%(4)	23.7%(9)	50.0%(19)	5.3%(2)	10.5%(4)	100.0%(38)
安全な避難場所	10.5%(4)	44.7%(17)	31.6%(12)	2.6%(1)	10.5%(4)	100.0%(38)
分離不安	5.3%(2)	13.2%(5)	55.3%(21)	5.3%(2)	21.1%(8)	100.0%(38)
安全基地	10.5%(4)	23.7%(9)	50.0%(19)	5.3%(2)	10.5%(4)	100.0%(38)

注:()内は実際の人数を表す

表2 高校生恋人無し群において4つの愛着機能について選択された対象の割合

	親	友人	恋人	その他	いない	総計
近接性の維持	12.0%(13)	54.6%(59)		6.5%(7)	26.9%(29)	100.0%(108)
安全な避難場所	12.0%(13)	60.2%(65)		7.4%(8)	20.4%(22)	100.0%(108)
分離不安	14.8%(16)	38.9%(42)		11.1%(12)	35.2%(38)	100.0%(108)
安全基地	12.0%(13)	54.6%(59)		6.5%(7)	26.9%(29)	100.0%(108)

注:()内は実際の人数を表す

大校生の恋人有り群と恋人無し群において、4つの愛着機能について誰が対象として選択されているのかを算出した(表3, 表4)。大学生の恋人有り群では、「安全な避難場所」と「安全基地」を求める対象として最も選択されていたのは友人であった(安全な避難場所: 38.0%, 安全基地: 42.0%)。「近接性の維持」と「分離不安」については恋人が最も高い割合で選択されていた(近接性の維持: 60.0%, 分離不安: 72.0%)。恋人と友人が選択された割合を合わせると66.0%~80.0%であった。大学生恋人無し群では4つの愛着機能について友人が選択される割合が最も高かった(39.6%~64.9%)。

愛着対象として親が選択される割合を高校生の恋人有り群と恋人無し群、大学生の恋人有り群と恋人無し群について比較した。高校生の恋人有り群と恋人無し群で4つの愛着機能のそれぞれについて親が選択される割合を比較すると、全ての愛着機能について恋人有り群よりも恋人無し群のほうが親を選択する割合が高かった。しかし、「分離不安」については恋人有り群に比べて恋人無し群のほうが約10%ほど親が選択される割合が高いものの、その他の機能については親が選択される割合が約1.5%しか変わらなかった。大学生の恋人有り群と恋人無し群で同様の比較を行った結果、高校生と同様に全ての愛着機能について恋人有り群よりも恋人無し群のほうが親を選択する割合が高かった。ただし、高校生と異なり大学生においては恋人有り群と恋人無し群の差が大きく、特に「安全基地」について恋人有り群に比べて恋人無し群のほうが親が選択される割合が16.9%高かった。

高校生の恋人有り群と恋人無し群、大学生の恋人有

り群と恋人無し群において異なった傾向があったのが愛着対象がいな者の割合であった。4つの愛着機能について高校生の恋人有り群では対象がいな者が10.5%~21.1%であったのに対して、高校生の恋人無し群では20.4%~35.2%であった。大学生の恋人有り群では対象がいな者が0.0%~2.0%であったのに対して、大学生の恋人無し群では「分離不安」に関しては23.4%と高いものの、その他の機能については7.2%~11.7%であった。

高校生の恋人有り群と大学生の恋人有り群を比較すると、どの愛着機能についても高校生の恋人有り群に比べて大学生の恋人有り群のほうが親が選択される割合が高かった。この傾向は高校生の恋人無し群と大学生の恋人無し群についても同様であった。ただし、高校生の恋人有り群と大学生の恋人有り群では、親が選択される割合の差が1.5%~9.5%であるのに対して、高校生の恋人無し群と大学生の恋人無し群では親が選択される割合の差が4.1%~24.9%であった。

また、愛着機能の対象となる人物がいないと答えた者について、高校生の恋人有り群と大学生の恋人有り群を比較すると、どの愛着機能についても大学生の恋人有り群に比べて高校生の恋人有り群のほうが対象がいないと回答する割合が高かった。高校生の恋人無し群と大学生の恋人無し群についても同様の傾向がみとれた。高校生の恋人有り群と大学生の恋人有り群では、対象がいないと回答された割合の差が8.5%~21.1%であるのに対して、高校生の恋人無し群と大学生の恋人無し群では対象がいないと回答された割合の差が11.8%~19.7%であった。

表3 大学生恋人有り群において4つの愛着機能について選択された対象の割合

	親	友人	恋人	その他	いない	総計
近接性の維持	12.0% (6)	20.0% (10)	60.0% (30)	6.0% (3)	2.0% (1)	100.0% (50)
安全な避難場所	18.0% (9)	38.0% (19)	34.0% (17)	10.0% (5)	0.0%	100.0% (50)
分離不安	10.0% (5)	6.0% (3)	72.0% (36)	12.0% (6)	0.0%	100.0% (50)
安全基地	20.0% (10)	42.0% (21)	24.0% (12)	14.0% (7)	0.0%	100.0% (50)

注: ()内は実際の人数を表す

表4 大学生恋人無し群において4つの愛着機能について選択された対象の割合

	親	友人	恋人	その他	いない	総計
近接性の維持	19.8% (22)	52.3% (58)		16.2% (18)	11.7% (13)	100.0% (111)
安全な避難場所	18.9% (21)	64.9% (72)		9.0% (10)	7.2% (8)	100.0% (111)
分離不安	18.9% (21)	39.6% (44)		18.0% (20)	23.4% (26)	100.0% (111)
安全基地	36.9% (41)	47.7% (53)		8.1% (9)	7.2% (8)	100.0% (111)

注: ()内は実際の人数を表す

考 察

本研究で示された主要な結果は、恋人の有無に関わらず4つの愛着機能の全てについて、大学生が愛着対象として選択した親の割合が高校生よりも高い割合を示したことである。これは以下の2点において重要である。

第1に青年期中期から青年期後期に至る過程で「近接性の維持」と「安全な避難場所」の対象となる人物として親が選択される割合が多かった。Hazan & Zeifman (1994) や Fraley & Davis (1997) の研究結果からは、「近接性の維持」と「安全な避難場所」の対象となる人物が親から友人や恋人へ移行することが示されている。しかし、本研究の結果はこれらの先行研究とは逆の結果となったのである。第2に「分離不安」と「安全基地」の対象となる人物としても親が選択される割合が多かった。Hazan & Zeifman (1994) や Fraley & Davis (1997) の研究結果からは、青年期中期から青年期後期に至る過程で「分離不安」と「安全基地」について親がどのような位置づけがなされるのかが明らかではなかった。しかし、本研究の結果からは「分離不安」と「安全基地」の対象となる人物として親が選択される割合が増加することが示唆された。これらの2つの結果から、青年期中期から青年期後期にかけて親が再び愛着対象としてみなおされるということが考えられる。

青年期における愛着対象の移行に関する研究の中では、親がいったん愛着対象でなくなった後に、再び愛着対象としてみなおされるプロセスはこれまでの知見からは見出されていない。しかし、このようなプロセスを間接的に支持する研究結果も存在する。若尾 (2001) は大学生を対象に「安全な避難場所」と「安全基地」について複数の場面や状況を設定して、誰が愛着対象として選択されるのかを検討した。ここで注目すべき結果は、愛着対象としては親、友人や恋人が選択されていたが、同じ愛着機能の中でも状況や要因ごとに選択される愛着対象が異なっていることであった。そのため、若尾 (2001) は青年期には場面や状況に応じて愛着対象を選択して使い分けしている可能性があることについて言及している。愛着対象の使い分けを行うためには、その前提として複数の対象との間に愛着関係を形成していなければならないといえるだろう。しかし、愛着対象の移行が起こることによって親が愛着対象でなくなってしまうのであれば、愛着対象の使い分けは成立しえないといえる。そのため、若尾

(2001)の研究結果は親がいったん愛着対象でなくなった後に再び愛着対象としてみなおされるというプロセスを間接的に支持しているといえるだろう。

また、恋人の有無によって愛着対象として選択される対象が異なるのかについて検討した。その目的は、親を愛着対象として選択するのはどのような人であるのかを明らかにすることであった。高校生と大学生において恋人がいる者は愛着対象として恋人が選択される割合が高かった。恋人がいる者は愛着対象として恋人が選択されるという結果は、Hazan & Zeifman (1994) や Trinkle & Bartholomew (1997) の結果と類似したものであった。本研究で新たに見出された結果は、高校生で恋人がいない者は対象がいなくて答えた者の割合が高く、大学生で恋人がいない者は親を愛着対象として選択する割合が高かったことである。

片岡・園田 (2009) は愛着対象がいなくても分析を行い、既存の愛着対象からの分離プロセスと新たな対象との間に形成される愛着プロセスが一連のプロセスである可能性の他に、独立したプロセスである可能性も考えられることについて論じている。恋人という存在がいなくても限っては、青年期中期には親との愛着関係から分離したが他の関係と新たな愛着関係を形成しておらず、そのような者が青年期後期に至り、親を再び愛着対象としてみなおしているという可能性が考えられるだろう。また、青年期中期から青年期後期にかけて、恋人がいなくても恋人がいる者についても愛着対象として親がわずかながらに増えていた。親から分離して、その後に親を再びみなおすことと、親密な友人関係や恋愛関係を新たに形成することという2つの独立したプロセスが青年期中期から青年期後期における愛着対象の移行において起っていると考えられる。

愛着対象の移行における標準的なプロセスは青年期前期から青年期後期にかけて親から友人、そして恋人へと対象が移行していくことである。本研究は愛着対象の移行プロセスにおいて青年期中期から青年期後期にかけて親が愛着対象として再び選択されることを明らかにした。さらに、恋人のいない者は青年期中期に愛着対象がいなくても青年期後期に親を再び愛着対象としてみなおすようになる可能性を新たに示した。この「みなおし」の背景には次のようなプロセスが想定される。乳幼児期の親子関係は保護—被保護の一方的な関係であるが、青年期になって形成される友人や恋人との愛着関係は、対等な立場で互いが互いを頼りあうことを期待する双方向的な関係である。このような

新たな愛着対象との関係を形成することを経て、青年期に親が愛着対象として再びみなおされるようになることは一方向的な親子関係から双方向的な親子関係へと愛着関係を再構築していることを示唆するのではないだろうか。親子関係の再構築は自立した大人として親と向き合うことであるため、青年期における様々な発達課題に影響を与えることであろう。そして、自立した大人として成長していく中で、友人や恋人との関係も、児童にみられるような物理的な近接性が重要である関係から、成熟した個人同士が心理的な安心感を与え合うような関係へと再構築されていくのではないだろうか。青年期に起こる愛着対象の移行は、親子関係とその他の親密な関係の再構築を含んだプロセスであり、そのようなプロセスを経験することによって個人が自立した大人になっていくと考えられるだろう。

最後に今後の課題について述べる。親がいったん愛着対象でなくなった後に再び愛着対象としてみなおされることは普遍的なものなのか、文化差による我が国における特有のものなのか、あるいは青年期が延長されたことによって現代の若者が親を愛着対象として再び見なすようになるということなのか、などの可能性について検討する必要があるだろう。また、本研究では交際期間が2年以上の者については分析がなされていない点についても今後の検討が必要である。誰が愛着対象であるかどうかを判断するために4つの愛着機能に関する項目を質問紙で用いたが、4つの愛着機能はどれも同じ方向だったといえる。今後はどのような指標が愛着対象であるかどうかを判断するために適切であるのかの検討が必要である。最後に、愛着対象の移行プロセスは親から友人や恋人へ対象が移行しては戻ることを繰り返しつつ徐々に進んでいく可能性があるため、縦断研究のような形で個人の移行プロセスを詳細に捉える必要があるだろう。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bowlby, J. 1969. *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか 訳 1976 母子関係の理論1: 愛着行動 岩崎学術出版社).
- Bowlby, J. 1973. *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger* New York: Basic Books. (黒田実郎ほか 訳 1977 母子関係の理論2: 分離不安 岩崎学術出版社).
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. W. W. Norton. (仁科弥生訳 1977 『幼児期と社会』 みすず書房).
- Fraley, R. C. & Davis, K. E. (1997). Attachment formation and transfer in young adults' close friendships and romantic relationships. *Personal Relationships*, **4**, 131-144.
- Freeman, H. & Brown, B. (2001). Primary Attachment to Parents and Peers during Adolescence: Differences by Attachment Style. *Journal of Youth and Adolescence*, **30**, 653-674.
- Havighust, R. J. (1943). *Human development and education*. New York: Longmans, Green. (荘子雅子訳 1958 人間の発達課題と教育 牧書店).
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1987). Romantic Love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1994). Attachment as an Organizational Framework for Research on Close Relationships. *Psychological Inquiry*, **5**, 1-22.
- Hazan, C., Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships*, **5**, (pp.151-178). London: Jessica Kingsley.
- Hollingsworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton.
- 片岡祥・園田直子 (2009). 青年期において愛着対象がないことの意味 九州心理学会第70回大会発表論文集, 16.
- Kobak, R., Rosenthal, N. L., Zajac, K. & Madsen, S. D. (2007). Adolescent Attachment Hierarchies and the Search for an Adult Pair-Bond. *New Directions for Child and Adolescent Development*, **117**, 57-72.
- Main, M. & Weston, D. R. (1981). The Quality of the Toddler's Relationships to Mother and to Father: Related to Conflict Behavior and the Readiness to Establish New Relationships. *Child Development*, **52**, 932-940.
- Main, M., Kaplan, N. & Cassidy, J. (1985). Security in Infancy, Childhood, and Adulthood: A Move to the Level of Representation. *Monographs of the Society for research in Child Development*, **50**, 66-104.
- Meeus, W., Oosterwegel, A. & Vollebergh, W. (2002).

- Parental and peer attachment and identity development in adolescence. *Journal of Adolescence*, **25**, 93-106.
- 村上達也 (2009). 児童版アタッチメント強度尺度の作成 日本パーソナリティ心理学会第18回大会発表論文集, 100-101.
- Nikerson, A., B. & Nagle, R., J. (2005). Parent and peer attachment in late childhood and early adolescence. *The Journal of Early Adolescence*, **25**, 223-249.
- 丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, **13**, 156-169.
- Trinkle, S. J. & Bartholomew, K. (1997). Hierarchies of attachment relationships in young adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, **14**, 603-625.
- 若尾良徳 (2001). 青年期のアタッチメント対象は誰か? ~安全基地現象の観点から~ 東京都立大学心理学研究, **11**, 7-15.
- Weiss, R. S. (1982). Attachment in Adult Life', in C.M. Parkes & J. Stevenson-Hinde (eds), *The Place of Attachment in Human Behavior*, pp. 171-184. New York: Basic Books.

Parents' locations in transfer of attachment object that occurs in adolescence.

SHO KATAOKA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

NAOKO SONODA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The purpose of this study was to examine the transfer of attachment objects in adolescence. The participants were 146 high school students and 161 university students. They answered the questions who is the object person concerning four functions of attachment: proximity maintenance, safe haven, separation anxiety, and secure base. As the results, the ratios that parents were chosen as the objects in university students were compared with that of high school students were high in all the functions. This result inconsistent with a general finding that parents as the objects are transferred to others according to child's growing up indicates a possibility that parents are reconsidered as the objects in late adolescence. Both of high school students and university students who have the lover tended to choose the lover and friends as the objects. High school students who didn't have the lover tended to choose friends or nobody as the object. On the other hand, university students who didn't have the lover tended to choose parents or friends. These results indicate the students in middle-adolescence haven't made new attached relationships though they separated from their parents, and the students in late adolescence seem to reconsider their parents as the objects.

Key words: transfer of attachment objects, parents' locations, attachment functions, in adolescence